



### コロナ禍によってもたらされたもの

新型コロナウイルスの世界的なパンデミックが生じて以降、人々は、価値観や社会活動のあり方を含め現代社会のあらゆる面で、好むと好まざるに関係なく大きな変革の必要に迫られてきた。この流れはアフターコロナの世界（願わくは、速やかにかつ平和裡にそのような世界になって欲しいものだが）でも変わらないと思われる。研究者という非常に限定された、そして世の中から見てもやや特殊な職種の日常に限っても、学会活動や諸会議のオンライン化などの変化が起きており、コミュニケーション手段の非接触化がもたらすプラス面およびマイナス面を、生化学会の諸先生は日々実感されているのではないだろうか。もちろん研究活動は実験結果をベースにした議論が進められるものである以上、一部の例外を除いて、他者との完全な非接触化が比較的難しい業種ではある。筆者自身も含め従来の face to face によるコミュニケーションに慣れ親しんだ研究者にとって、現在の研究環境はもどかしさや停滞感を感じるものではないだろうか？ しかしながら、ビフォーコロナのような世界にはおそらく戻れない以上、より効率が良く、時代にふさわしく、かつ用途に適したコミュニケーション手段を模索する必要がある、研究活動のあり方もそれに合わせて今後大きく変化すると予想される。また研究内容の面でも、コロナは大きな変革を我々研究者に否応なく迫っている。アカデミアや民間企業などを問わず、これまでに全世界で多くの研究者が、各国政府機関や国民の要

請により、新型コロナウイルス感染症対策に多くのリソースを注いできたが、その結果、RNA ワクチンの早期実用化、コロナ感染症診断薬の開発、さらにビッグデータを活用したデータサイエンスに基づく感染症対策など、感染症関連分野で大きな成果が得られている。これは非常時におけるリソースの「選択と集中」の正しい成果とも言えるが、それ以外の分野の研究が少なくとも短期的には滞る懸念は否定できない。ただ一方で、こうした社会的要請に応えたとはいえ、全世界で一定数の研究者がある程度同じ方向性で研究を進めれば、短期間でこれだけの成果をあげることが可能であることを証明した点、そしてこの危機を乗り越えるためだったからこそ、これら関連分野の研究が大きく前進できたと言える、という2点は注目に値する。すなわちパンデミックのような全世界に広がる未曾有の危機では、研究者の価値観や発想にも大きな変革を迫り、ある面では思考の共有を、そしてある面では思考の独創化を今まで以上に追求した結果、サイエンスを予想以上に、そして場合によっては予想外の方向にも強烈に発展させ、当該分野のイノベーションを引き起こす契機になり得たのではないだろうか。現在見られるサイエンスの成果はごく短期間に成し得た、従って感染症およびその関連分野にやや限定された成果であるが、多くの研究者のマインドが変化しつつあるのなら、こうした流れは長期的には確実に感染症研究以外の分野にも波及するとも考えられる。かつて17世紀のイギリスではペストが大流行したが、故郷に避難したアイザック・ニュートンは自由に思考する時間を得て万有引力の法則を発見したと言われている。後にニュートンはこの期間を「創造的休暇」と呼んだらしいが、今現在まさに「創造的休暇」中であり、未来のイノベーションに繋がる思索を温める研究者が世界中のどこかにいるのであろう。その適切な評価は後世に委ねるが、

(N)